スンダリ・ミカの「私も知らないネパール!?」

ナマステ!日本人ネパール大衆歌謡歌手スンダリ・ミカです。1999年からネパールに暮らし始め、気がつけば今年の７月で十年経ちました。2011年に13年ぶりの観光年を迎えるネパール。「脱力系★癒しの国ネパール（これは私が勝手につけたキャッチコピーですが……）」のあんなこと・こんなことを、私のナビゲートでお楽しみくださいませ。

ネパールのピンクリボン運動

皆さん、ピンクリボン運動というものを御存じですか？全世界的に乳がんの早期発見、早期治療を呼び掛ける啓蒙活動として有名ですよね？ここネパールでも、日本からの医療チームの支援によるピンクリボン運動が数年前から活発に行われています。

首都カトマンズに暮らす人々と違って、地方の村の生活では、医療施設そのものが不足していることも然ることながら、村人の病気に対する知識も不足しているために、なおるはずの病気を放置し、発病した時にはすでに手後れという悲しい現実があります。

ティーチィングホスピタル（日本の援助でできたネパールの国立病院）での数年前の調査結果によると、この病院での乳がん平均腫瘍径は5.5cmだったということで、調査にあたられた高田悦雄医師（獨協医大超音波センター）も唖然とされたそうです。（同時期の獨協医大での乳がん平均腫瘍径は1.6cm）今年３月に行われた日本・ネパール合同シンポジウムでの調査発表によると、ティーチングホスピタルでの平均腫瘍径の値は3.9cmに縮小したとのことですが、それでもまだ日本の2倍以上の大きさです。

高田医師は次のように話しています。「10年生存率をみると5cm以上の乳癌だと約50%ですが、2cm以下だと90%以上になります。まずネパールでの目標として、乳癌平均腫瘍径を3cmに置きたい。そうすれば10年生存率は75%程度になり、それでもかなりの改善が見込めます。このことを踏まえて、ネパールではまず自己触診法（Self check）を教育することから始めるのが最も現状にあっていると考えています。そのうちに装置を使った検診が出来るようになるでしょう。触診でも3cmの癌は見つけることが出来ます。病院に来る乳癌患者の腫瘍径が4cm程度のネパールでは、触診でも死亡率減少効果が期待できるのです。」

……しかし、なんでまた私がこんなにネパールでの乳がん事情に詳しいかというと、知人を通じて、先ほどの高田医師からネパールでのピンクリボン運動推進のためのキャンペーンソングを作って歌ってもらえないか、という御相談受けたことが切っ掛けなのでした。この依頼メールをいただいたとき、私もちょうど「そろそろ乳がん検診しないとヤバいよな……マンモグラフィも3年やっていないよ。」と思って、病院を探していたところだったんです。（凄い偶然！）それで、このメールをいただいてすぐの7月7日の七夕にティーチングホスピタルにいって、私もマンモグラフィを撮ってきました！

その日ちょうど居合わせたほかの患者さんは38歳の女性。数年前から生理前、生理後に胸の痛みがあって、これはもしや癌かも知れない（痛い＝病気＝癌？！という発想）とかねてから心配していたそうで、今回カトマンズの親戚をたずねて東のジャパ郡（カトマンズからバスで19時間）からはるばる上京してきたとのこと。（マンモグラフィはネパール中にまだ4台程度しか無く、そのうち3台がカトマンズにあります。）こうやって心配して病院に来るのも「胸の痛み」という信号があったからこそ。そうでなければ彼女も大家族の御飯の支度の心配とひきかえに、カトマンズにやってきただろうか？ネパールの皆さん、癌は決して痛く無いんですよ。痛いのはほかの病気。癌が痛くなったらすでに手後れ。恐いなこの事実。

ところで、ピンクリボン運動inネパールのキャンペーンソングって、日本人ネパール大衆歌謡歌手としての本領を発揮できる素晴らしいお仕事ではありませんか?!

今後の新たな展開に注目してください！

日本乳腺甲状腺超音波診断会議
（JABTS） 国際委員会
http://www.jabts.net/

ネパール・ビジネス最前線～明日のネパールを作る優良企業紹介～

第一回　バイオエナジー
企業名：グローバル バイオエナジー ネパール社
（日本・ネパール合弁会社）
ミッション：次世代バイオ燃料を生み出す
ジャトロファの森を作れ!
こんな人にお勧め：環境問題、開発、貧困改善問題に興味のある人

ジャトロファ燃料とは?

日本名を「なんようあぶらぎり」といい、樹高 3m から 8m 程度の潅木。やせた土地でも生長が早く、干ばつや病気に強いことで知られる。種子は毒性が強いが、油分に極めて富むことから、古くから利用が行われており、施肥をしなくても１ヘクタールあたり５トン程度の種子が収穫できる。通常食用植物の栽培が行われない酸性土壌でも育つため、1990年代以降は植物性バイオディーゼル燃料の材料として脚光を浴びている。

現在我がネパールのディーゼル油は100%インドからの輸入に頼るしか無い状況であるが、将来、しかもそう遠くない、３～４年後からは、国内でディーゼル燃料を生産できるようになるという。現在のディーゼル輸入総量のうち30%だけでも国産のバイオディーゼルを消費するようになれば、試算として約1億ドルもの収益がこの国にもたらされることになるという。

１本のジャトロファの木から年間に8キロの酸素が排出されるというが、ジャトロファの森を作ることはネパールの国益につながるだけで無く、今や世界的問題になっている地球温暖化対策への切り札としても世界が注目をしているプロジェクトなのだ。

日本・ネパール　ベンチャー企業

地球環境問題の総合コンサルティング会社である日本の「株式会社地球環境都市計画（本社：神奈川県横浜市）」現地プロジェクトリーダー福島取締役は、旧知の友を通じての４０年来に渡るネパールとの交流の中で、アグリ事業会社「マルチパーパス ファーミング社」のラグ ラジ オンタ社長と運命の出会いをした。去る６月２８日、両社の役員が出席する中、カトマンズ市内で行われた「ジャトロファ・セミナー」には、バイオエナジー関係者、植物学者、植林関係者、報道機関、一般市民などから４０人以上の参加があり、白熱した議論が展開された。

すべてはネパールの国民のために

「ジャトロファ植林事業の展開の中で生じるあらゆる社会的、地域的問題や提案事項をネパールの人たちと一緒に解決していきたい。植林地域の村の雇用、経済活動の支援のだけではなく、教育、医療環境の改善にも取り組んで行きたい。」と福島氏は力強く語った。

世界中には機会に恵まれないで厳しい生活を強いられている人たちが沢山いる。彼らの生活や未来を日本の技術やシステムで少しでも変えることができたら、、、。お金では買えないその国の未来に投資したい。福島氏の眼差しは20年後、30年後のネパールを見据えている。

地球とネパールのために今すぐできること

現在中央ネパールのチトワン地区での苗の量産と東ネパールのジャパ郡での植林活動がすでに成功している。今後は西ネパールのバルディア地区への植林活動が始まる予定だ。４年後からはネパールの山間部への植林も展開していく予定。

日本でこのエコプロジェクトを応援したい人に朗報がある。苗の植林に出資してみないか？「植樹証明書」や植林に携わった現地の人々から届く手紙・プロジェクトレポートを手にしたら、もっとネパールを、地球を愛おしく感じることだろう。（記者：ガネシュ・タパ）

●エコプロジェクトお問い合わせ窓口
お申し込みFAXダイヤル　0120－1111－59
㈱環境経営ホールディングス
（業種：環境保全コンサルティング　本社：神奈川県横浜市）
TEL（代）045-435-3364　URL:http://www.eco-m.co.jp
E-mail:info@eco-m.co.jp

ネパールの記事に関するお問い合わせ、ファンメールはこちら。 maitreyiindia.nepal@gmail.com